

2024.8.1—2024.8.3  
 仙台研修報告書

**第61回 全国国際教育研究大会 宮城大会**  
 「平和とは何か。今だからこそ実践したい国際理解教育とは。」  
 ～曇りなき心の月を先立てて浮世の国際社会を照らしてぞ行く～



期日/令和6年8月1日(木)～8月2日(金)  
 会場/トークネットボール仙台 小ホール

**大会日程 (予定)**

**<1日目>**  
 10:00-10:30 開会行事  
 10:45-12:00 英語弁論大会  
 13:00-14:00 日本語弁論大会  
 14:20-16:10 記念講演会  
 (桑山紀彦氏 & 石森広美氏)  
 16:20-16:50 弁論大会表彰式  
 16:55-17:55 生徒交流会  
 (国際教育脱出ゲーム)

**<2日目>**  
 9:00-10:40 生徒研究発表会  
 10:50-12:05 生徒:ワークショップ  
 教員:研究発表会  
 12:20-12:40 生徒研究発表表彰式  
 12:45-13:00 閉会行事

※閉会行事終了後、園遊会(希望者のみ)

**記念講演**

『平和のために私たちが  
 できることを考える』

**講師** 桑山紀彦氏  
 NPO法人『地球のステージ』  
 代表理事

**講師** 石森広美氏  
 北海道教育大学  
 国際地域学科  
 地域教育専攻准教授

**お申込み・お問合せ**  
 大会事務局 宮城県仙台東高等学校  
 担当/山口 朋昭 TEL/022-289-4140 FAX/022-289-4383  
 参加申し込みは右記のQRコードか大会事務局までご連絡ください  
 (県内メ切:7月22日(月)まで)

主催/全国国際教育研究協議会 \*共催/独立行政法人国際協力機構 \*後援/外務省・文部科学省・宮城県・宮城県教育委員会・宮城県高等学校長協会 他



参加者 三木裕月・泉佳帆・今井真夏海・平木咲衣・前朱音



## 【第1日目】8月1日(木)

### 第61回全国国際教育研究大会 宮城大会参加

#### 1. 14:20～記念講演

「平和のために、私たちができることを考える」

講師 NPO 法人「地球ステージ」代表理事 桑山紀彦氏

[www.e-stageone.org](http://www.e-stageone.org)

北海道教育大学准教授 石森広美氏



桑山紀彦氏は日本で医師として診療を行う（精神科医・心療内科医）一方、パレスチナ、東ティモール、地震等の被災地で国際医療支援活動を行っている。東日本大震災では自ら被災しながら直後から診療を行い、被災した人々の心のケアを行う。現在は神奈川県海老名市に「海老名こころのクリニック」を開設している。

「地球ステージ」は現役の医師である桑山紀彦氏が世界の紛争、災害の地で出会った人々の輝き、明るくたくましく生きる姿をオリジナルの音楽と大画面の映像、桑山氏の語りで伝えるもの。観た人がそれぞれの感性で受け止める、情感に訴える内容になっている。



石森広美准教授は、数年前まで、宮城県の英語教員として、宮城県のみならず全国の国際教育、グローバル教育を牽引してきた。現在は北海道教育大学函館校で、国際理解教育、グローバル教育を推進し、学生を海外へ引率するなどして、「地球的な視野」の醸成を精力的に図っている。

今回の講演では「平和のために私たちができることを考える～国際理解教育が目指すもの～」のタイトルで、国際理解の根源は人権と平和であること、平和には「消極的平和」と「積極的平和」があることを解説されました。平和に関わる世界の問題は、災害や環境問題も含まれ、地球市民の育成を目指すことで解決の方向へ向かうことができるが、世界の問題をいかに他人事から自分事へ変えることができるかが課題である。言い換えれば、日本で生まれてよかったではなく、自分にも関連する問題だと感じられるようになるにはどのようにすればよいか。「自分とのつながり」を見出すことができれば、自分には関係ない・遠い世界のことは考えなくなるだろう。

◇それぞれの講演の後、桑山紀彦氏×石森広子氏の対談では・・・・・・・・

- ・ガザの日々命が奪われる状況の日常では、記憶と感情が離れてしまっている子供がいる。色を使った絵を描かない—自分たちの日常にカラフルな色なんてない画用紙に真黒く塗るしかない子供—何も感じない、感じるってどういうこと？
- ・正義の反対は正義でないものではなく、もう 1 つの正義かもしれない
- ・日本の学校の教室の中にも戦争の種はないだろうか？教室の中に平和を作ろう
- ・世の中には合わない人は絶対いる。全ての人と仲良くは難しい。でも距離を保てばいい。攻撃しない—それが共存の 1 つのあり方ではないか。
- ・（桑山氏）モハマッド・マンスールさんとは 13 歳の時からの関わり。彼はガザから出たことがないが、ガザで大学を卒業し、現在は「PRESS」のシャツを着て、身を危険にさらしながら、毎日ガザの状況を日本の報道へも伝えてくれている。彼の姿をニュース番組で見た人もいるだろう。彼のことを息子のように感じ接している。
- ・知っている人がいると、感じられる。他人事ではなくなる。でも直接会う・知り合うことは限られた人しかできない。
- ・行っていない人に伝えるために、情感を使う。情感を揺さぶる。情感が動けば、行ったことと同じになる可能性があるのではないか。
- ・（石森氏）教師がロールモデルになる！自分が行動していないとだめだ。アクター (actor) となる。経験が自信となるから、一緒にやろう！ちょっと手助け、教師がモデルとなる。紛争の中にいる人たちを忘れないでいよう。

どうしたら戦争は終わるのか？ ➡ 桑山氏 心理社会的支援をしている  
心のケアを実践

U

原因は考えない・謝罪もいらない  
トラウマのついたところがスタート

向き合い方が新しい段階に入っている  
平和を目指す方法を知ってほしい

## 生徒のコメント

Aさん

ガザの人々と実際にあって様々な活動を共にしていく中で、ガザの人々に生きる希望、将来の夢などを与えており、戦争中でも何度も SNS を通してやり取りを行っているところが時代の進歩を感じるとともに、素晴らしいことだと思いました。また、このように通信技術の進歩に伴って、我々高校生にもできることが何か増えたんじゃないかと考えた。

Bさん

紛争が起きている地に行き、心のケアを行ってガザの人達を心理的に支援しているところがすごいなと感じました。日本だけではなく、世界の課題にも目を向けることの大切さを改めて知りました。

Cさん

私たちよりももっと小さい子供たちでさえ、自分の世界を黒一色でしか表せられなくて、日常を「楽しい」と思うこともできないのがとても残酷で、戦争や紛争は本当に存在してはいけないものなのだと改めて感じました。「自分には関係ないことだから」で終わらせるのではなく、同じ地球に住んでいる身として世界で起きていることにも目を向けて、自分にできることを小さいことからでも考えていくことが大切だと感じました。

Dさん

今私たちが平和に暮らしているどこかでは紛争などで安全と危険とのはざままで過ごしている人やケアを必要とする人がいて思った通りの生活ができなく苦しんでいる人がたくさんいることを改めて思い知りました。争いは、生きる人々の苦しみや悲しみそのものであり、そのような出来事を二度と起こさないよう、現代を生きる私達がもう一度深く考え、これから先の未来を生きる多くの人々に伝えていくべきだと思いました。平和というあたりまえが一日でも早く世界中へ広がるよう、今あるあたりまえを大事に、これからも日々生きていくことが大切だと感じました。

Eさん

いま私たちが何気なく生活している時間もどこかで、命の危機を感じながら生活しているということを感じさせられました。見えている世界がすべてなのではなく見えていない世界も含めて私たちが住んでいる地球なのだと感じました。

## 2. 生徒交流会 (16:55-17:55) 「国際教育脱出ゲーム」

小ホール～会館すべてを使って(仙台の高校生の企画)

まず、チームを見つける、自分のチームを結成した生徒から小ホールを飛び出す

### 状況説明

それぞれが初対面のため、緊張している様子でしたが、ディズニーキャストのような陽気なゲームマスターのおかげで場が和み、笑い声が聞こえるようなスタートでした。

ゲームがスタートし、それぞれのチームメイトを探すため、声を出して積極的に行動しました。

ゲームを進めていくと同時に、初対面だったチームメイトと仲良くなり、最後には下の名前で呼び合うほど仲良くなりました。ゲームが終わっても SNS を交換したり、写真を撮って交友関係を深め、翌日も声を掛け合えるほど仲良くなりました。

最初は緊張していた雰囲気でしたが、ゲームが終了するころには笑い声が絶えないほど仲良くなれました。(Eさん)





### 3. 第1日終了後

明日に向けての接続テスト：パソコンとプロジェクターの設定  
思いのほか時間がかかる。待ち時間に他校との交流

パソコン設定接続テストの待ち時間に今回参加した様々な地域の高校生と協力したり、雑談したりする時間がありました。その中で各々の取り組みや、考え、心構えなどを聞いて、お互いにすごく刺激があり、距離の縮まる時間だったと感じた。(Aさん)



## 【第2日目】8月2日（金）

### 1. 第13回高校生国際理解・国際協力に関する研究発表会

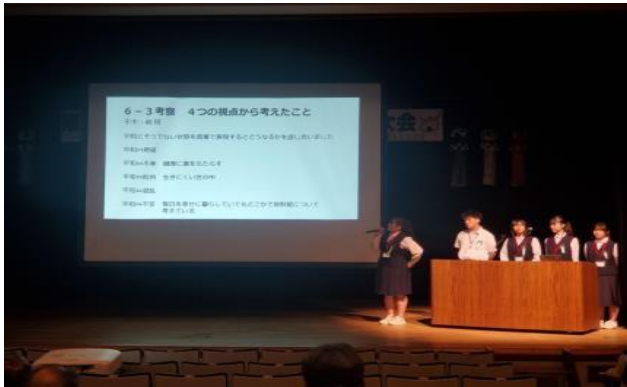
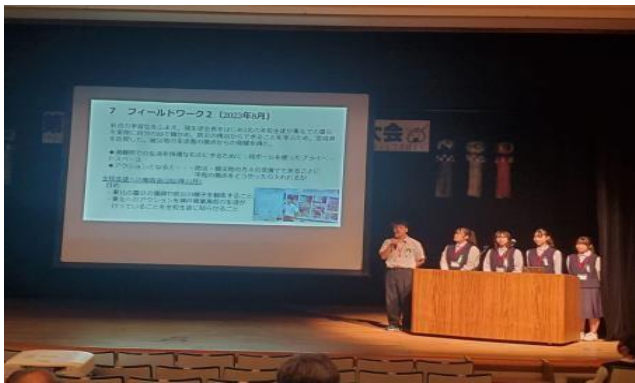
出場校（発表順）

- ①東北 宮城県 宮城県宮城野高騰学校国際・語学ゼミナール  
「空気を”読む”から”作る”へ」
- ②近畿 兵庫県 兵庫県立神戸商業高等学校 生徒会有志  
「東日本大震災に学ぶ平和と共生～グローバルな視点とローカルな視点のつながりを探究する」
- ③九州 宮崎県 宮崎カリタス学院聖ドミニコ学園高等学校ボランティア部  
「私たちのポイ活～紙芝居で繋がる地域クリーン作戦～」
- ④東北 青森県 八戸聖ウルスラ学院高等学校ジャンボ国際交流部  
「在住外国人との共生に不可欠なもの～『やさしい日本語』の有用性を探る～」
- ⑤四国 愛媛県 愛媛県立東温高等学校国際理解研究同好会  
「愛媛の海と街 私たちの挑戦 We care, We share, We Dare!」
- ⑥関東甲信越 静岡県 翔凜高等学校  
「女性に選択の自由を！（世界の女性人権）」

**表彰 本校は国際理解・国際協力奨励賞を受賞しました。**

全体として、地域や外国人との交流を目指した活動や実践が高評価されている傾向がありました。

「国際貢献」が主軸となっている。私たちがどのようなアクションを行えるか、石森先生の講演の中に出てきた、「アクターになる」がキーワード。



発表のコメント

Aさん

前日の夜中までスライドを編集し、どのようにマイクを持つ人が動くかとかも相談し、通しでやってみたときにしっかり皆動けていて、スライドも問題なく動かしていた時は、すごくうれしかったし、チームの一体感が増したように感じて、とても気持ちがよかった。

またスライドを文字ばっかではなく、その文字の中の要点のみを書き出していく作業は、自分たちでスライドや発表内容を再確認でき、各々の解釈などをしっかり持っていないとできない作業だったので、直前に皆で集まって話し合いながらやったからこそ成功できたと考えた。

Cさん

前期生徒会長の学びを受けての学習会や防災ジュニアリーダーでの学びなど、たくさんある内容の中から 8 分間に納めるために何を話すべきなのかを通し練習等を何度も重ねながら考えました。どうすれば聞き手に興味を持ってもらえるのか発表の前日まで話し合い、前置きに海に関連したお寿司の話を入れてみたりなど、試行錯誤を繰り返しました。他校の発表を聞いて、もっと内容を深く掘り下げられる場所もあったと感じましたが、同じ地震の被災地である神戸からの視点を共有することができて良かったと思いました。今回発表した内容を次の代の生徒会にも引き継いで学校内だけでなく、地域にも広めていくことが必要だと感じました。

Bさん

前日まで試行錯誤しながら、どのようにすればわかりやすく説明できるようになるのかを考え、スライドを作成しました。発表方法も話し合い、聞き手に注目してもらえるように声の大きさや間の取り方も自分たちで話し合うことができました。発表が終わった後、私たちの話を聞いて興味を持ってくださった人の意見を聞くことができ、とても貴重な経験をすることができました。

Dさん

前期生徒会長の学びをつなぎ、学校外で発信できたことがとてもうれしく思います。前期生徒会長の学びを受け学びをスタートし防災ジュニアリーダーの学びをつなげ、内容を 8 分以内にまとめることはとても難しかったですが、前日まで試行錯誤を重ね自分たちが満足するところまで完成しました。しかし、他校の発表を聞き感銘を受けました。このような貴重な経験ができてとてもうれしく感じ、たくさんの方に興味を持つきっかけとなりました。次期生徒会以降でもこのような取り組みを継続できるようにしていこうと考えました。

Eさん

前期生徒会長の学びを私たち生徒会と防災ジュニアリーダーの学び、発信によってこのような形で、再び東日本大震災を受けた土地で発表をできたことがうれしく思いました。

私たちが昨年度にそれぞれの気持ち、思いを話し合い膨らませた内容を、いかに分かりやすく聞き手に届けられるか、8分間に納められるか考えました。

ただスライドを話すだけでは、時間もオーバーし、聞き手も面白くないと考え、私たち 5人でそれぞれのスライドを要約し、意見を出し合いながら発表方法を考えました。

前日に他校の発表を少し拝見でき、完成度の違いに驚きました。他校の発表によって刺激を受け、聞き手にとってどのように感じられるか様々な視点で発表に取り組むことが出来ました。

発表を終え、結果として満足はできませんでしたが、私たち生徒会と防災ジュニアリーダーの取り組みを発表できる機会を得て良かったと感じました。

そしてこの経験を経て、今後の私たちの活動を継続していかなければならないものだと改めて感じました。また、同じような活動をしている高校とつながり、様々な視点をもって活動していきたいと考えました。

## 2. 教員研究発表（10:50~12:05）

岩手県・青森県・宮城県・石川県・兵庫県（本校）・愛媛県の6名の教員の研究発表会が生徒の交流会・ワークショップと並行して、会議室2教室を使い行われました。

藤井の発表は「50年ぶりのユネスコ教育勧告改定から展望する高等学校で育成する国際理解の資質・能力—高等学校の先導的な海外研修に着目して—」

海外研修でどのような国際理解の資質・能力が育成されるのかを先導的な海外研修を実施しているSGHとユネスコスクール双方に認定されている15校の海外研修の特徴から考察するものです。

## 3. 生徒交流会・ワークショップ（小ホール）






「平和のために今できること」

3人ほどのチームに分かれ、それぞれの班に与えられた人権、貧困、教育格差などのテーマについて話し合いをしました。話し合いの後、班の代表一人が発表し、他の班と意見を共有しました。それぞれのテーマをふまえて、平和について多様な視点から考えることができ、平和についてもう一度考え直す良い機会となりました。（Bさん）

## 4. 震災遺構訪問—手厚い研修・資料・配布物

訪問先：震災遺構仙台市立荒浜小学校

参加者：42名（本大会に参加した生徒・教員の希望者）

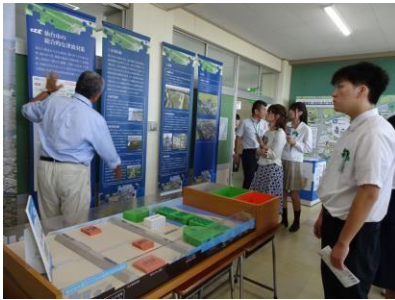
1 牛タン弁当（お茶付き）  ※イメージです	2 仙台弁けし巾着  ・「んだ」「めんこい」の2種類あります ・東北大学小林健教授（方言学）監修 ・防災グッズ入れとして活用してください。	3 アイリスオーヤマ 富士山の水  ・アイリスオーヤマは仙台市青葉区五橋に本社を置く1971年設立の会社。 ・同社は東川町でサッカー大会開催、参加選手に「震災学習プログラム」を実施。
4 株式会社バルボアの焼き菓子「Getto」  ・株式会社バルボアは仙台市に本社を置く1981年創業の会社。 ・同社製品は仙台市と仙台市でのみ販売。通販では入手できません。 ・小分けの販売「華崎」も仙台の華崎百貨店。	5 仙台管区気象台からの防災パンフ 震災遺構荒浜小学校パンフ 	

午前の研究発表の後、バスの中で弁当を食べ、仙台の高校生2名による事前学習と震災経験談語り部高校生は2011年3月11日当時は保育園児、一人は県外にいた。実際、周りがあたふたあわただしかったのは記憶しているが、お昼寝の時間であったり、怖い思いはしていなかったという。

震災遺構仙台市立荒浜小学校へ到着後、2班に分かれ、校舎内の説明をしていただく。







帰路、仙台駅までのバスの中では、仙台気象台の職員の方からの専門的なレクチャーを受けました。その中で、「8月26日が何の日か知っていますか？」という問いかけに、三木さんが素早く「火山防災の日」と答えていました。火山防災の日は令和5年に活動火山対策特別措置法の一部が改正され、今年4月に施行されています。

## 震災遺構で感じたこと

Aさん

去年、宮城県の大川小学校や、門脇小学校を訪れた際にも仰っていた「ここにも東日本大震災以前には何気ない日常があった」というフレーズを今回の震災遺構めぐりの際にも言っていたので、震災が起きてからのことばかりではなく、それ以前の日常のことを知ろうとすることが私たち被災者以外が、被災者の方々に寄り添える方法だと感じた。

Bさん

実際に被災地に行くことで、写真や動画では感じることはできない衝撃を受けました。津波によって壊れた柵や流されてきた物によって傷がついた廊下を見て、自然災害の恐ろしさを改めて感じました。

Cさん

実際に被災地を訪れて話を聞いていると、自分が想像していたものよりも自然災害ははるかに恐ろしいものなのだと痛感しました。津波が2階にまで到達していた時に2階の家庭科室にいた人もいたと聞いたときに、その情景を想像してぞっとしました。また、地域の避難訓練では地域住民が荒浜小学校に避難することを想定していたため、津波が来た時には津波の方向に避難する人もいたと聞いて、改めて避難所や避難経路を実際に災害が起こった時のことを想定して確認することが大切だと感じました。

Dさん

実際に被害を受けた場所を訪れてみると、被災にあった時のままのかたちやのものなどがたくさんあり、本当にそこに人がたくさんいて過ごしていたことが感じ取れました。私は聞くことでしか知らなかった情報以外にもたくさん知れ、いつ今の生活が無くなるかわからないんだと改めて痛感しました。この姿が忘れ去られないためにもより深く知り、興味を持ち学んでいくことが大切だと感じました。

Eさん

初めて実際に被害を受けた場所を訪れ、言葉にできない感情を受けました。「当時ここはどんな風だった」「ここには誰がいた」「地震が起きなければ卒業式の予定だった」このような説明を受け、今まで話しやニュースでしか知らなかった情報が、目から、耳から、軽率ですが自分がその場にいたように心に響きました。

### 【第3日目】8月3日（土）

JICA 地球ひろば（国立行政法人 国際協力機構）訪問 10:00~12:00  
JICA 海外協力隊員 有吉一人氏の体験談と体験談に基づく国際協力の講話と  
体験ゾーン探検コース



#### 有吉氏の話より

有吉一人氏は 2007-2009 の期間、ミクロネシア連邦国で PC インストラクターとして派遣され、ミクロネシア短期大学でコンピュータを教えていた。一般家庭でホームステイをしていたが、協力隊員でホームステイができるのは少ない。それは、一般家庭でホームステイするには、JICA による家庭調査などがあり、安全な家庭・人であることが明らかになっていないとだめで、平和な地域でしかできない。

海外協力隊が入るのは発展途上国が前提であるから、ケースは少なくなる。



また、ミクロネシアでは、ペットとして、犬は珍しい。食用であるため、犬と人間の関係が良くない。

ミクロネシアでは、家庭にたいいて豚がいる。また、地域の慣習として、太っている人が称賛される。それは、十分食べ物があるつまりお金があるということのあかしとなるからである。

街中には、日本製の中古車が漢字表記のまま使われている。第2次世界大戦時の日本統治の名残で日本語を話せるおじいさんもいる。

国の課題として、食料は基本輸入で、電気代も高い。雨が降ると水・電気が止まってしまう。ごみ処理場（焼却場）がなく、ごみ山ができており、それらのごみが海まではみ出してしまい、島の州の海の汚染が激しい（泳げない）。

人はおおらかな気質で、雨が降ると学校に来なかったりする人がいたり、時間の概念が異なり、時間を守らない。そういう、文化の違いが大きい。



## JICA 地球ひろばで新たに知ったこと等

Aさん

今までニュースや授業でなどの、情報でしか感じていなかった、発展途上国の人たちの苦労や、過酷な環境を少しでも感じれた。（机や数学の勉強などの部分）

Bさん

アフリカなどの発展途上国で子供達が運んでいる水の重さを実際に体験しました。テレビで見たことはあったけれど、思っているよりも重たく、子供が運んでいることが信じられませんでした。炎天下の中で何時間もかけて運んでいる子供達が、安心して飲める水を一早く提供できる環境が必要だと改めて感じました。

Cさん

各国の SDGs に対する進捗度を見て、自分が思っていたよりも世界的に SDGs の目標が達成できていないと感じました。進捗度 1 位のフィンランドでは「②飢餓をゼロに」「⑫つくる責任 つかう責任」「⑬気候変動に具体的な対策を」の 3 つが特に改善されていないのを見て、先進国だからこそ、物を大切に扱うという意識が薄れていると感じました。日本では、自然環境に関する項目がほとんど改善されていないと感じました。海に囲まれているからこそ、二酸化炭素の排出やゴミのポイ捨てなどが海の環境にも直結しやすいのだと思いました。この SDGs の項目を世界で達成するためには、目標年数を先延ばしにするだけでなく、一人一人が SDGs 達成への意識を持って日々生活をしていくことが大切だと感じました。

Dさん

今の私たちは、普通に生活ができて、学校に行けて、勉強ができて、たくさんの友達がいる。しかし、私たちの普通ができていない国は想像以上に多くあることを知りました。少しでも早く世界中が私たちが思う普通ができるように行動に移していけないと感じました。私たちができることは少なくあまり大きな力でもないが、少しずつでも行動に移していければ解消していくことにつながるかもしれないと感じました。新たに多くのことが実際に学べ、SDGs も達成しなければならない目標だと強く思いました。この普通だと思えていることができていることに感謝をしながら過ごしていきたいと思います。

Eさん

SDGs の 17 の項目すべてを身近で感じました。今までは言葉でしか理解できませんでしたが、今回の経験で、実際に達成しないといけない内容、困っている地域の状況など様々なことを学びました。特に発展途上国の教育の状況が印象に残りました。ノートがないため、書き留めることが出来ず、一度埋めてしまうと全て消してしまい、新たな文字を書き留めるそうです。つまり、見返すことが出来ず、今その瞬間に学ばなければいけないということです。私たちの教育現場がいかに恵まれているかを感じさせられました。



## ◇総括 3日間で得たこと・感じたこと・さらにこれからやりたいこと

Aさん

私はこの三日間で、今このように5人皆、安全な状況でインターネットを通して、文章を入力できているが、自分たちと同じように文字を理解して、安全な場所を確保して、インターネットを使うことができない人たちが世界にはまだ沢山いるということが再確認できた。また、今まではこのような問題に私たち、高校生でできることはまったくないと思っていたが、今回様々な場面で世界問題に触れることが多く、その中で私は、SNSを通して、知り合った様々な国の子たちと、関係を持ち続けて、何か戦争などに巻き込まれたりした際は、少しでも心の支えになりたいと考えた。

Bさん

今まで授業で学んできた内容を、講演会や体験を通じてもう一度考え直す貴重な研修となりました。環境問題だけでなく、紛争や貧困など世界には様々な課題が存在しています。自分が今、当たり前のようにできていることもできない人たちが同じ世界で生活していることを改めて感じました。不自由なく生活できていることに感謝しながらも、そのようにできない人達を他人事にするのではなく、自分に何ができるのかを考え行動しなければならないと思いました。また、自分一人で考えるのではなく、グループで意見を交換することで新たな視点を発見したり、違う角度から物事を見つめることができることに気づきました。今回の研修では、他県の人とも関わることができ、多くの意見を交換することができました。この3日間で、多くの課題に触れて平和の大切さを改めて実感しました。これからは、講演会やボランティアに積極的に参加し、自分にできることを見つけたり、意見を出して行動できる人になりたいと思います。

Cさん

今回の研修を通して今までなんとなくでしか考えられなかった世界の課題などについて改めて考えるきっかけを作ることができました。紛争地の方との関わりをもっている方や被災にあった方の話からひしひしと伝わってくる苦い感情、実際に東日本大震災を経験した同じ高校生の体験談、津波が到達していた荒浜小学校の当時の状態など、たくさんのお話や被災地を自分の目で見て、聞いた時に、日本や世界で起きていることについて表面的な部分にしか目を向けることができていると感じました。そして、今回の研修のようなもっと深い内容を知る機会も必要だと思いました。他にも、今回の研修で他県の高校生とも関わることでその地域の方言や名産品なども知ることができて、兵庫県内では感じられない楽しさもあり、人との関わり大切さをより感じることができました。今回は、前期生徒会長や防災ジュニアリーダーでの学びを繋いだ結果、このような大切な機会を頂けたことを嬉しく思います。次はこの3日間で学んだことを生徒会や学校内、地域への共有、そして次期の生徒会へと繋いでより学びを深めていくことが必要だと感じました。そして、当たり前だと思って過ごしている今の時間も世界では命の危機と隣り合わせになっている人がいるという事実を忘れず、いつも通りの日常を過ごせていることに感謝していきたいと思います。

Dさん

この3日間通し、様々な経験を行うことができました。この研究発表を行うためにも学習会などを行い学びを深めていくことができました。今まで知らなかったたくさんを知り、この活動に繋がれたことをうれしく思います。間接的に聞くことでしか得られなかった情報が、この研修に参加したことや宮城県等を訪れたことで直接的に感じることができ、自分がその時感じたかのように感じることができました。前期生徒会長の始めの学びのおかげでここまでの活動ができ、学校内外でもこの活動について発信することができたことをとてもうれしく思います。この活動はこれで終わるのではなく私たち以降にもつないでいく必要があると考えています。県外の高中生や留学生の方と関わることができる場がありました。そこでは異なる意見でも一人ひとり感じていることがあり、それらをそれぞれ大切に尊重するというのも小さいことかもしれないが私たちができる小さな一歩なのかもしれないと感じました。今、あたりまえのように何不自由なくできていることもできない人たちが同じ地球という場所で生活している。その平和という「あたりまえ」を世界中に広げるために、自分にできる小さなことからでも考えていきたいと思いました。現地の人々の願いのように今日本で何事もなく過ごしている平和な生活があたりまえだと思わずに大切に、日常に感謝をし、一分一秒を無駄にせず過ごしていきたいと思っています。

Eさん

今回の研修は私にとって考え方を広げられる貴重な経験になりました。SDGs、紛争、災害など様々なことを今まで耳にする機会がありましたが、私一人、もしくは周りの身近な人の意見を聞く機会しかなかったので、考えが一部に偏ってしまっていました。しかし今回の講演などで、私の中に今までなかった考え方が生まれました。今生活して見えているのが世界なのではなく、見えていない世界も実際にあるのだと感じました。いま私たちが生活できている、こうしてお話を聞ける環境全てが恵まれているのだと実感しました。私のように、考え方の固定概念があったり、どこか地球上で起こっている問題を他人事のように感じている人がきっといると思います。そこで私たちが聞いてきたことを共有し、今後も私たちのような貴重な経験ができる場を設け、一人でも多くの人に地球の世界の中で起こっていることをたくさん知ってもらいたいと思います。そして私自身もこの貴重な体験を活かし

て、日々の生活で毎日幸せをかみしめ、大切に過ごしたいと思っています。

3日間の中で、仙台での国際理解教育・平和を考える講演会、全国レベルの研究大会での発表、全国から選抜されて集った高校生との交流、東北の震災遺構の見学、そして東京での JICA 地球ひろばでの研修と盛りだくさんの経験を一度にすることができました。神戸から仙台へそして世界へ視野を広げることができたでしょうか？これらの経験がじわじわと今後の活動や経験につながっていかれることを願っています。（引率者）